江戸時代後半における『三国志演義』の受容

―洒落本『讃極史』を題材にして―

中川諭

序

わが国は古来中国からさまざまな文化を輸入し、それらを受容してきた。そしてそのことによって日本の文化が発展していったと言える。文学の分野でも、古くは平安時代の女流文学、たとえば『枕草子』や『源氏物語』などに中国文学の影響が見て取れるし、中には『遊仙窟』のように、中国本国では滅んでしまったけれどもわが日本にのみ伝わっていたという作品もある。さらには江戸時代、山井鼎の『七経孟子考文』のように、日本人による中国の古典の研究でありながら、後に中国で注目され、四庫全書に収められたものである。また中国では正式の書物として認められなかったいわゆる「小説」から影響を受けている日本の作品も少なくない。都賀庭鐘の『英草紙』や滝沢馬琴の『南総里八犬伝』が、明代の「三言」や『水滸伝』、清代の『紅楼夢』から影響を受けていることについては、つとに指摘がある。(1)

そのような中で、江戸時代宝暦・明和から安永年間にかけて流行した洒落本に『讃極史（さんごくし）』という作品がある。千代丘草菴主人著、鶴辺菴のあるじ佐保丸序、泉楼主人跋。寛政七年（一七九五）以降の刊とされる。(2)これはその書名が示すとおり、いわゆる「三国志」を下敷きにしたパロディである。しかしその本文中に、たとえば

呂布が此頃司徒王允が方から貂蟬という美なる封きらずを貰ひやして、…(3)

とあって、架空の女性「貂蟬」の名前が出てくるから、陳寿による正史『三国志』ではなく、羅貫中の『三国志演義』を下敷きにしていると考えられる。内容は次の通りである。蜀の玄徳が孔明に諸事を任せて、自らは名を「徳玄」と改め、そして孔明の故居臥龍岡の名を「臥楽岡」と変えてそこで暮らしていた。そこに呉の孫権が現れ、茶・菓子の話

や日本の流行について話していた。そこに魏の曹操もやって来て、お茶を飲み菓子やふぐ汁を食べながら、『三国志演義』の各場面について茶化しあう。そして色町へ出かけようと話がまとまり、終わる。このようにたわいもない内容なのであるが、そこには江戸時代の日本人が『三国志演義』をいかに受容していたかが示されていて興味深い。そこで本稿では、洒落本『讃極史』を通し、日本人の『三国志演義』受容の一端を探っていこうとするものである。

一

徳田武氏は『讃極史』の中に散りばめられている『三国志演義』の各場面からの出所を、『三国志演義』の回数と『通俗三国志』の巻数で示し、そして次のように述べている。(4)

『讃極史』は『演義』の硬い話を江戸の市井の卑俗な話に転義して楽しむ、というパロディを意図している。そのパロディを理解するためには、引用部分が『演義』のどの回のどういう話かを知っていることが必要である。その知識がないと、このパロディの妙味を味わうことはできない。

このような性質の作品を著わすことによって、作者はおのれが『演義』の細部にまで通暁していることを誇示している。そして、読者にも自分と同等の知識を持って読むことを要求している。

筆者も徳田氏のこの説に対して異論はない。しかし徳田氏が指摘している『讃極史』に見られる『三国志演義』からの引用の出所は、『讃極史』本文に具体的に『三国志演義』のどの場面かを示す固有名詞が出てきている部分に限られている。しかしながら『三国志演義』にもとづいている『讃極史』の中の会話は、必ずしも具体的な固有名詞が出てきている部分だけに限らない。たとえば、徳玄と曹操・孫権の三人が、曹操が「鉾を横たえて詩を賦」したことを話していた時に、次のような会話をする。(5)

〔徳〕鉾を横たへて詩を賦すと、あのようなうぬぼれを出すから、大きな目にあったさ。
〔曹〕そふじゃねへ。あのときやア茶番のしやした跡は大のみさ。
〔孫〕その大のみが過ぎて、あげくに喧嘩になったそうだぜ。
〔曹〕そんなきざは通者は言はねへもんだ。…

この「あげくに喧嘩になったそうだぜ。」という孫権のせりふは、『三国志演義』の第四十八回に見える、次の場面を踏まえていると思われる。(6)

忽見坐間一人進曰、「大軍相當之際、將士用命之時、丞相何故出此不吉之言。」操視之、乃揚州刺史沛國相人也。姓劉名馥字元顯。本人起自合肥、創立州治、聚逃散之民、立學校、廣屯田、興治教、深溝高壘、堅甲利兵、積盈倉之粟、作草店

數千椽、貯魚菅數百斛爲守戰之具、久事曹公、多立功蹟。馥曰「丞相何故出此不利之言乎。」操曰「何爲不利。」馥曰「『月明星稀、烏鵲南飛、遶樹三匝、無枝可依。』此大不利之言也。」操大怒「汝安敢敗吾興也。」手起一槊、刺死劉馥。遂乃罷宴。次日酒醒、悔恨不已。　（第四十八回「曹孟德横槊賦詩」）

『讀極史』の中で孫権が言う「喧嘩」とは、曹操が唱った「短歌行」の歌詞が不吉であると言った劉馥を、曹操が酔った勢いで殺してしまったことを指しているに相違あるまい。

また、徳玄が諸事を孔明に任せっきりであるという話題になった時、この三人は次のような会話をする。

〔孫〕徳さん程仕合な者はねへよ。諸事孔明にまかしじゃの。曹さんもあのしうちがよかろうぜ。

〔曹〕おれも近年中に、徳房といふ身になりやす。

〔徳〕おれが方の孔明といふものはあるめへぜ。

〔曹〕仲達といふ者があるよ。

〔徳〕そこが諸事まかせにすると言事もきいたよ。しかしどふも合点のいかねへもんさ。マアロあたりがむめへが、ふぐ汁といふしうちの男に見へるぜ。

〔曹〕なにさ、そんな男じゃねへ。節季に勘定所へひとりおいてもあやうくねへ人物さ。

〔徳〕先生のお目がねは違うめへが、此頃おいらが息子の近所でね、秘蔵の飼へ犬が急に病がついてゐるのを、そこの亭主が気がつかぬから、ぐっと寵愛しやした。そこで病だと言もんだから、ごうてきに食れへついたそうさ。それで亭主も其日のうちに極楽めへりさ。そこも飼い犬に食われめへぜ。

ここで徳玄は、孔明ほど立派な人物はあるまいと曹操・孫権に誇らしげに言うが、曹操は徳玄の孔明に対抗して仲達（司馬懿）の名を挙げる。しかし徳玄は仲達をふぐ汁のような男、すなわち懐に入れておくと毒に当たるかもしれない男ではないか、と評している。さらに徳玄は曹操に向かって、おまえも飼い犬にかまれてしまうのではないのか、と言っている。一方『三国志演義』において、司馬懿は元々曹操に仕える身であり、曹操の死後曹丕・曹叡に重く用いられ、蜀の諸葛孔明と対抗する人物として描かれている。そして祁山での孔明との戦いの後、司馬懿は曹芳のもとで曹爽とともに国事の補佐に当たっていたが、クーデターを起こして曹爽一派を失脚させ、自らは実権を掌握する。司馬懿自身はこのクーデターの後まもなく亡くなるのであるが、司馬懿の息子司馬師・司馬昭はさらに魏王朝内で実権を広げ、司馬炎に至って曹操が礎を築き曹丕によって打ち立てられた魏王朝は晋王朝に取って代わられる。ここに示した『讀極史』の三人の会話は、こうした『三国志演義』の司馬懿にまつわる一連のストーリーを踏まえているに相違あるまい。

以上の二例のように、『讀極史』の中には具体的に固有

名詞を示さなくても『三国志演義』の中のある場面を踏まえた上で会話が進められている個所も存在するのである。

また『讃極史』の語句レベルにおいても、『三国志演義』を十分踏まえた上で言葉が用いられているところもある。たとえば『讃極史』の冒頭部分、孫権が徳玄の住む臥楽岡へやってきたときの様子は次のように書かれている。

…老馬にまたがり、小坊主に美酒と鶏鹿等持たせ来る者あり。これ呉主孫権なり。古松の枝に雪を持たせたるを見ては、中の町松の内雪の面影あり。猿鶴の遊び戯るを見て、かむろの行きかふがごとし、と一人笑みを含みて、はや臥楽岡に到り。

孫権が臥楽岡に手みやげとして持ってきたものに、「鶏鹿」がある。「けいろく」と言えば、『三国志演義』の中には次のような一節がある。曹操と劉備は漢中の地を争って斜谷界口で対峙していた。曹操は駐屯が長くなったので兵を進めたいが、前面には張飛・趙雲たちが要道を押さえて待ちかまえているし、退けば劉備・孫権に笑われるだろうからと、どうすべきか悩んでいた。

忽値庖官進鶏湯、操見碗中有鶏肋、因而有感于懐。正沈吟之間、夏侯惇入帳來稟號令、爲夜間之用。操随口曰「鶏肋、鶏肋。」惇傳令、衆官都稱「鶏肋。」有行軍主簿楊修、見傳「鶏肋」二字、便教隨行軍士、各収拾行装、準備歸程。

（第七十二回「曹孟德忌殺楊修」）

この後曹操は自分の考えていることをすべて見抜く楊修の才能を妬んで、殺してしまう。進むに進めず、退くに退けない状態を曹操は「食之無肉、棄之有味。」の「鶏肋」にたとえた場面である。『讃極史』で孫権が手みやげに持ってきた「鶏鹿」とは字が異なるものの、ここの「鶏鹿」は『三国志演義』第七十二回の「鶏肋」を踏まえた言葉なのではないだろうか。

また『讃極史』で孫権が見た臥楽岡の様子の中に「古松の枝に雪を持たせたる」「猿鶴の遊び戯る」という語句が見える。これについては、『三国志演義』の中で劉備が初めて諸葛孔明の草庵を訪ねた帰り、劉備が見た臥龍岡のある隆中の様子が次のように描かれている。

果然山不高而秀雅、水不深而澄清、地不廣而平坦、林不大而茂盛。松篁交翠、猿鶴相親、觀之不已。

（第三十七回「劉玄德三顧草廬」）

『讃極史』の「古松」は『三国志演義』の「松篁交翠」を、同じく「猿鶴の遊び戯る」は「猿鶴相親」を踏まえた表現であることは明らかであろう。

その他『讃極史』の中には口取り（お茶菓子）の名前がいくつか出てくるのであるが、その中に「煎茶饅頭」・「九重饅頭」と二種類の饅頭の名前が見られる。『三国志演義』で「饅頭」といえば、第九十一回「孔明秋夜祭瀘水」に次

のような場面がある。諸葛孔明は南方の異民族の首領孟獲を七回捕らえ七回解き放して、南蛮人を平定した。孔明軍が成都に帰る途中瀘水に到ると、猖神の祟りで黒い霧が立ちこめ、強い風が吹いて砂や石が飛び交った。猖神の祟りを鎮めるには四十九人の人間の首を祭らなければならないが、孔明はもはや人一人殺すわけにはいかないと、牛や馬で人間の頭を作り、中に牛馬の肉を詰めて人間の首の代わりとした。これを「饅頭」と呼んだ。「饅頭」の起源とされる話である。[7]『讃極史』で二度ほど「饅頭」がでてくるというのも、あるいは『三国志演義』のこの場面を意識しているのではないかと考えられる。

以上述べたように、『讃極史』は具体的な固有名詞のない部分においても、細かい語句に到るまで『三国志演義』の場面を踏まえている可能性が高い。すなわち『讃極史』の作者の『三国志演義』の理解・受容のレベルは相当に高く深いものであったと考えられるのである。するとそういう作者の手になる『讃極史』の面白味を余すことなく享受するためには、読者の方にも作者と同レベルの『三国志演義』についての知識が要請されるのであり、徳田氏が述べておられるごとく、作者が読者に自分と同等の知識を要求するのも当然といえば当然のことと言える。つまり江戸後期において『三国志演義』は相当に高度の受容のされ方をしていたと考えられるのである。

二

ところで『三国志演義』には数多くの版本が現存し、それらは内容・文章によって大きく三つの系統に分けることができる。[8]そしてわが国には三つの系統に属する様々な版本が慶長年間にはすでに伝来しており、林羅山や天海僧正は『三国志演義』のテキストを所持し、原文で読んでいたようである。[9]また元禄二年（一六八九）から五年（一六九二）にかけてには、わが国で初めての『三国志演義』の翻訳である湖南文山の『通俗三国志』が出版されている。このようなことから、江戸時代中期までには『三国志演義』がわが国で読まれる土壌はできあがっていたといえる。一方、前節で述べたように、『讃極史』はかなり細部に至るまで『三国志演義』を踏まえて書かれている。では『讃極史』は『三国志演義』のどの版本によっているのであろうか。中国語で書かれた『三国志演義』によったのであろうか、それとも原書そのものではなく、翻訳『通俗三国志』によっているのであろうか。

『三国志演義』諸版本間でもっとも大きな内容の違いを見せるのは、関羽の架空の息子関索についての物語、すなわちいわゆる「花関索説話」と「関索説話」にかかわる部

分であろう。[10] しかし『讃極史』には関索にかかわるパロディは見られない。したがって関索の物語から『讃極史』の底本を探ることはできない。関索の物語に次いで『三国志演義』諸版本間に見られる内容の違いの大きいものは、現存最古の版本である嘉靖本には見られず、それと同系統の周曰校本の方には見られる十一の挿入説話である。[11] しかし『讃極史』には十一の挿入説話にかかわるパロディも見られず、関索の物語同様、この点からも『讃極史』の底本を探ることはできない。その他の『三国志演義』各版本間の内容の違いとしては、通行本である毛宗崗本がその底本である『李卓吾先生批評三国志』を修訂する際に改めた部分がある。[12] これらについても『讃極史』で下敷きにしているものは見られない。つまり『讃極史』でパロディに取り上げられている『三国志演義』の中の様々な場面は、『三国志演義』諸版本に共通する話ばかりなのである。したがって『三国志演義』の内容の面から『讃極史』の底本を考えることはできないのである。

ところが、『讃極史』の中に次のような会話がある。

〔孫〕…徳さん、司馬徽（しばび）が借屋へゐかしゃったことはあるかの。

〔徳〕此頃は行きやせぬが、めへとはちがつきさ、よふ笑ふおやぢだよ。

〔曹〕あいつが「よし、〻〻」も久しいものだの。

〔孫〕よふ口癖のある男だねへ。

〔曹〕松葉のおつす、鷄舌のざんす、五明のほんさんすかへト、わたくし、みな口ぐせだよ。

引用文中「司馬徽」に作っているが、これはもちろん「司馬徽」のことであろう。また『三国志演義』第三十五回には次のような場面がある。劉備が蔡瑁の暗殺計画を察知して新野へ逃げ帰る途中、水鏡先生司馬徽の草庵にたどり着いた時のことである。

水鏡曰「伏龍・鳳雛、兩人得一、可安天下」。玄徳便問曰「伏龍・鳳雛、何人也」。水鏡曰「好、好」。玄徳再問水鏡、水鏡曰「天色已晩、暫宿一宵、來日當言之」。却喚小童、其飲饌相待、留于客房内宿。　（第三十五回「劉玄徳遇司馬徽」）

劉備は司馬徽に「伏龍・鳳雛」が具体的に誰なのか尋ねるが、司馬徽はただ「好、好」としか答えなかった。先に引用した『讃極史』の徳玄・曹操・孫権の会話は『三国志演義』のこの場面を踏まえていることは明らかであろう。そして湖南文山『通俗三国志』は『三国志演義』のこの場面を次のように翻訳している。[13]

司馬徽ガ曰「伏龍・鳳雛ノ内ヲ一人得玉ハヾ、天下ハ掌ニアラン」。玄徳問テ曰「伏龍・鳳雛トハ如何ナル人ゾ」。司馬徽大ニ笑ヒ、手ヲ拍テ「好、〻」ト云。総ジテコノ司馬徽ハ、

善悪ヲ分タズ何コトモ皆「好、々」ト云リ。或時人キタリテ子ノ死タル由ヲ告ゲルニモ「好々」ト答ケレバ、其妻コレヲ諫テ、「人ミナ君ノ徳ヲ慕テ來リ告ゲルニ、如何ナレバ子ノ死タルヲ『好々』トハ云玉フゾ」ト申ケレバ、司馬徽笑テ「汝ガ言モ亦好々」ト云リ。玄徳シキリニ伏龍・鳳雛ヲ問玉ヘバ、司馬徽申シケルハ「今夜ハ此ニ一宿シ玉ヘ。明日告申ン」トテ、童子ヲ召テ酒食ヲ献ラレケレバ、玄徳スデニ臥房ニ入玉ヘリ。

（巻十四「玄徳到司馬徽山庄」）

先の『三国志演義』第三十五回本文と『通俗三国志』の文章を比較すると、『通俗三国志』の「総ジテコノ司馬徽ハ」から「『汝ガ言モ亦好々』ト云リ」までに該当する『三国志演義』の原文がない。先の『三国志演義』からの引用は呉観明本『李卓吾先生批評三国志』によっているが、呉観明本以外の『三国志演義』の版本、例えば嘉靖本・周曰校本や毛宗崗本、さらに系統を異にする余象斗本や劉龍田本などにも、『通俗三国志』に見られる司馬徽の、何事に対しても皆「好々」と言う、という逸話はない。つまりこれは『通俗三国志』における挿入と考えるべきものであり、[14]『通俗三国志』では『三国志演義』に比べて司馬徽の「好々」の口癖がはるかに強調されていると言えよう。そして『讃極史』では司馬徽について徳玄が「よふ笑ふおやぢ」と言い、曹操と孫権が司馬徽の口癖「よし、〻〻」を話題に取り上げる。つまり『讃極史』では司馬徽の「好、好」を口癖としてかなり意識しているのである。このことはあるいは司馬徽の何事に対しても「好々」と言っていたという『通俗三国志』で挿入されている逸話を強く意識しているのではないかと考えられる。そうすると、『讃極史』は『三国志演義』の原文からというよりも、むしろ翻訳である『通俗三国志』を通して成立した『三国志演義』のパロディなのではないかと考えられるのである。

『通俗三国志』は元禄五年に初めて刊行されて以来、寛延三年（一七五〇）・天明五年（一七八五）と版を重ね、明治になって補刻本が刊行されるまで、あわせて四回ほど版を重ねている。[15]つまりそれだけ多く印刷され、多くの日本人に読まれたのである。一方『三国志演義』の各版本は、確かに日本国内に比較的多く伝えられているとはいえ、やはりその数は限られたものであり、誰もが簡単に目にし得るものではなかったであろう。また『三国志演義』のある版本がそのまま日本国内で覆刻されたという話も寡聞にして知らない。したがって『三国志演義』の原文そのものは『通俗三国志』ほど多くの人に読まれたわけではあるまい。多くの日本人は『通俗三国志』を通して『三国志演義』の世界に触れたのであり、そうした中から『讃極史』も生まれたものではないかと考えられるのである。

結

『三国志』といえば、もちろん正しくは陳寿による正史『三国志』のことであり、羅貫中による歴史小説は『三国志演義』あるいは『三国演義』と呼ばなければならない。にもかかわらず現代の日本では『三国志演義』のことを俗に「三国志」と呼ぶことがある。この原因としてまず考えられるのは、吉川英治氏の『三国志』が高い人気を保っていることにあろう。しかしながらさらにそれに先だって、「三国志」と題しながら『三国志演義』と同じ内容を持ったものとして、江戸時代に『通俗三国志』という翻訳が存在していた。さらに言えば、『通俗三国志』の底本となった呉観明本は、書名を『李卓吾先生批評三国志』と題しているのであって、「～三国志演義」などとはなっていない。そして呉観明本の書名を受け継いだ翻訳『通俗三国志』が刊行以来日本人の心の中に深く浸透していたのである。ここに日本人が『三国志演義』のことを「三国志」と呼ぶ端緒があったのではないかと考えられる。日本人にとって『通俗三国志』はそれだけ影響力の大きかった作品なのである。そう考えてこそ、『三国志演義』の内容を下敷きとしたパロディである洒落本の名前が『讃極史（さんごくし）』となっている理由も明らかになるのではなかろうか。

（1）小川陽一「三言と英草紙―三現身包龍図断冤を中心に―」（和漢比較文学叢書7『近世文学と漢文学』）、同「八犬伝拾零―とくに紅楼夢から―」（和漢比較文学叢書17『江戸小説と漢文学』）など。

（2）徳田武「『李卓吾先生批評三国志』解説」（ゆまに書房中国歴史小説選集4『李卓吾先生批評三国志』）。

（3）テキストとしては、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本によった。また『讃極史』からの引用については、表記を読みやすいように改めた。以下同じ。

（4）注2前掲徳田論文。

（5）〔徳〕は徳玄、〔曹〕は曹操、〔孫〕は孫権のせりふであることを示す。

（6）本稿における『三国志演義』からの引用は、呉観明本『李卓吾先生批評三国志』による。それは、後述するように、『讃極史』は『通俗三国志』と密接な関係にあろうと思われ、また『通俗三国志』の底本は呉観明本『李卓吾先生批評三国志』であるとされているからである。

なお、『通俗三国志』の底本が呉観明本であることについては、小川環樹「関索の伝説そのほか」（『中国小説史の研究』（岩波書店、一九六八年）所収。原載は小川環樹・金田純一郎訳岩波文庫『三国志』（旧版）第八冊付録）参照。

（7）宋の高承撰『事物起原』巻九「酒醴飲食部」に「饅頭」の起源として、諸葛孔明がかかわる類似の話を載せている。

（8）『三国志演義』の諸版本については、以下の拙論を参照されたい。

①「『三国演義』版本の研究―毛宗崗本の成立過程―」（『集刊東洋学』第六十一号、一九八九年）

②「『三国志演義』版本の研究―建陽刊「花関索」系諸本の相互関係―」（『日本中国学会報』第四十四集、一九九二年）

③「『三国志演義』版本の研究―「関索」系諸本の相互関係―」（『集刊東洋学』第六十九号、一九九三年）

(9) 徳田武「江戸時代における『三国志演義』」（『しにか』一九九四年四月、大修館書店）。

(10) 関索の物語については、金文京『花関索伝の研究』（汲古書院、一九八九年）「解説編」参照。

(11) 十一の挿入説話については、注8前掲①拙論参照。ただし十一の挿入説話の内の一つは、いわゆる「関索説話」である。

(12) 具体的な個所は、毛宗崗の冒頭にある「凡例」および総評である「読三国志法」で毛宗崗自身が指摘している。

(13) 本稿における『通俗三国志』からの引用は、明治になって補刻された大阪文海堂刊本（筆者蔵）である。この本は、大半は元禄五年の原刊本の版木をそのまま用いているが、ごく一部（おそらく版木が磨滅した部分）のみ新たに覆刻したものである。

(14) このように『通俗三国志』では、原文にない話を加えていることがある。注2前掲徳田論文参照。

(15) 筆者蔵本の刊記による。